

南米中央アンデス文明形成期における地域間インタラクションの解明 ーペルー北部山地神殿遺跡出土の土器分析の視点からー

Studies on Interactions in the Formative Period of Central Andes: analyses of the ceramics of
a ceremonial site of the north highland of Peru.

井口欣也（教養学部・准教授）

Kinya Inokuchi (Faculty of Liberal Arts, associate professor)

1. 本研究の目的と意義

本研究の目的は、南米の中央アンデス地帯に展開した古代アンデス文明の形成プロセスを解明するための基礎研究として、代表者がこれまでペルーのクントウル・ワシ遺跡発掘調査で収集した土器資料の分析をおこなうことにある。クントウル・ワシは、ペルー共和国の北部山地に位置する神殿遺跡で、紀元前 950 年から前 50 年ころに機能していたと考えられる。

遺跡から出土する土器資料は、研究の基本的な枠組みとなる遺跡の編年確立と他地域との相互関係を解明するうえで重要であるが、本遺跡のように長年の発掘調査による大量の資料を対象に分析した先行研究は非常に少ないため、本研究の成果はアンデス文明形成期研究において重要な意義を有するものといえる。

2. クントウル・ワシ遺跡出土土器のタイポロジー分析

クントウル・ワシ遺跡の発掘調査は、加藤泰建（本学教養学部教授）、大貫良夫（東京大学名誉教授）を研究代表者として、1988 年以来 12 回にわたっておこなわれた。井口は発掘の最初から共同研究者として参加し土器資料の分析を担当してきた。収集された土器資料は、約 25×30cm の布製袋の数にして 29932 にも及ぶが、その大半は破片の資料である。このような大量の土器破片資料から遺跡の編年を確立し、時期ごとの土器の特徴を分析するために、土器のタイポロジー分析をおこなった。タイポロジーは同遺跡の調査研究の過程で資料の蓄積とともに改良が加えられてきたが、本プロジェクトによって最終的なタイポロジーを確立することができた。

上記の土器分析によって、イドロ期、クントウル・ワシ期、コパ期、ソテラ期という 4 時期によって構成されるクントウル・ワシ遺跡の編年を確立した。土器のタイプ分類のため、大量の破片資料を分析し、土器の表面色、表面調整、器形、装飾、胎土などの属性を抽出し、これらの一定の組み合わせを有するまとまりを「土器タイプ」として設定した。各時期に対応するタイプとして、イドロ期は 16、クントウル・ワシ器は 25、コパ期は 14、ソテラ器は 6、全部で 61 のタイプを設定することができた。

3. 土器資料のデジタル化

本プロジェクトによって、収集した土器資料のデジタル化を実現することができた。これによって上記のような分析の効率を格段に上げることが可能になったといえる。

本遺跡の土器資料の記録化は、従来、観察による記述以外に、実測による図面と撮影による写真によっておこなってきた。しかし、紙媒体による図面と 35mm フィルムによる写真は劣化するおそれがあり、分析にも労力がかかる。本プロジェクトによって、研究アシスタントの協力を得て集中的なコンピュータ上での作業をおこない、これらの記録をデジタル・データ化することが

できた。

図面と写真はタイプごとに代表的でかつ十分な「タイプ・サンプル」として編集することが可能となり、これによって図版 85 枚、写真プレート 87 枚を完成することができた。これは同時に他遺跡出土の土器資料との比較分析をするための基礎的作業ともなった。

4. 研究成果の概要

これまで述べてきた研究によって、土器分析の視点からクントウル・ワシ神殿の変化のプロセスと、より広範囲な地域の中での位置づけやインタラクションについて多くのことが明らかになった。

とりわけ形成期後期のクントウル・ワシは、神殿建築など土器以外の資料も含めた総合的分析から、アンデスにおける広範囲のネットワークに依存する「広域型神殿」として位置づけることができ、この時期がクントウル・ワシ神殿の研究において重要な鍵を握る時期であるとの見通しを得ていた（加藤 2007）が、土器資料の分析によって、この時期における広域型神殿の性質とネットワークの変化についてさらに具体的な様相を明らかにすることができたといえる。

5. 研究成果の公表と今後の展開

クントウル・ワシの調査研究は、前述のとおり主に加藤泰建教授を研究代表者とする科学研究費補助金（基盤研究（S））によるプロジェクトによって進められてきた。上記の成果についても、その研究成果報告書において論文として刊行する機会を得た（井口 2007）。

クントウル・ワシ遺跡の調査研究はひととおり完了したといえるが、土器資料やその他の資料の整理・分析の成果は、今後、アンデス形成期研究における重要な参照点として大きな意味をもち、他の遺跡の調査研究が蓄積されることによってその重要性はさらに増すものと考えられる。

参考文献

井口欣也

2007 「クントウル・ワシ遺跡出土の土器資料」、加藤泰建（編著）、『先史アンデス社会の文明形成プロセス』（平成 14-18 年度科学研究費補助金〔基盤研究（S）〕研究成果報告書）、pp.59-90.

加藤泰建（編著）

2007 『先史アンデス社会の文明形成プロセス』（平成 14-18 年度科学研究費補助金〔基盤研究（S）〕研究成果報告書）